

患者のあり様に合わせて学生が患者に 関わるための指導指針

—死の転帰をとった肺癌患者を受け持った 学生への指導過程の分析から—

河野義貴(基礎看護学)

【キーワード】 終末期, 実習, 学生, 指導過程,
指導者の認識

本研究は、死の転機を迎えた肺癌患者を受け持った学生への指導過程を分析し、指導指針を得ることを目的とする。

研究対象は、学生への指導過程における指導者の認識と表現である。

研究方法は、すべての指導場面をプロセスレコードに再構成し、指導によって学生の行動に変化が認められ、その変化が対象への看護につながった15場面を研究素材とした。各場面の意味をとり出し、そこから指導者の認識と表現の特徴をとり出した。さらにその共通性・相異性を検討し、指導指針を抽出した。

とり出した指導者の認識と表現の特徴は80項目あり、共通性と相異性を検討した結果、死の転機を迎えた患者を受け持った学生への指導指針が14項目抽出された。

- 1 受け持ち対象を決める時は、ケアが必要と感じた対象と教員が関わり、学生が対象と関わることを想像して、学生の学びと対象への影響を考えて決定する。
- 2 状況が複雑で事実の意味を学生が描けていないと思われる時は、優先される事実に限定して尋ね、学生の表現に合わせてイメージが広がるように言葉を補い、対象に関わるができるようになる。
- 3 事実だけを述べた時は、学生の考えを尋ねて、事実の意味を対象の位置から考えることができるように促す。それでも具体的に関わる方法を考えることができない時は、対象の優先される事実を強調して表現し、必要な関わりを考えることができるようにする。
- 4 学生が事実の意味を部分的にとらえている時は、対象の全体像とつなげて事実の意味を多くの面から考えるように促す。
- 5 対象へのケアを申し出た時は、ケアの流れと対象の状態を付き合わせて、ケアによる対象の体と心、家族への影響を考えて、目的を明確にする。付き合わせる過程で学生の実力を判断して、学生だけでは不安な時は教員と一緒に実践する。
- 6 対象の状態から先の見通しを予測し、学生が対象の変化に合わせて関わっていくことができるように看護の根拠を伝えて、学生自身も考えるように促す。
- 7 学生の計画を聞く時は、具体的な方法を尋ねて、効果が発揮できるように言葉を補い、学生が対象の位置から計画の意味を考えることができるように支援する。
- 8 学生がケアを行うときは、ケアの有効性を判断するためにケアの手順と学生の能力、対象の状態を重ねてイメージして、教員が補うべきポイントを明確にして不足する技術を補って、負担が大きいと判断した時は代行する。
- 9 学生が対象に関わる時は、学生と対象の両方の位置から事実の意味を考えて見守り、学生が自らの言動の意味を考えることができている時は、教員が対象にとって意味がある実践をして見せて、実践の意味を付き合わせる。
- 10 対象と関わっている時に学生の心が動かされ、対象から良い反応を得ながらケアを提供できていると判断できた時は、教員の評価を伝え、対象の変化に対応して関わっていくことができるように助言する。
- 11 家族が思いを表出して対象に関わった時は、家族の思いに沿いながら必要な支援を行い、支援した時に感じたことを学生と共有する。
- 12 学生が自己評価するための付き合わせをする時

は、学生の行動と考えを尋ねて実践した事実を把握し、事実と根拠の上り下りができるようにする。更に、実践した学びを学生の今後に役立てて欲しいと思った時は、学生の特徴と実践した事実をつなげて評価することができるようにする。

- 13 事実に対して学生の関心が深まるように支援し、学生の心が動きだして関わる方向性を描くことができれば、大丈夫だと判断する。
- 14 教員が対象に関わった時は、教員が実践した意味を学生に考えるように促し、学生が考えることができない時は、教員が考えた根拠を伝え、学生自身に考えるように促す。